

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 筑波大学附属坂戸高等学校 (※正式名称を記載)

種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}

中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校

教員養成大学 専修学校、各種学校

特別支援学校

その他 (例: 小中高一貫)

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒350-0214

埼玉県坂戸市千代田1-24-1

E-mail fsakadokou@un.tsukuba.ac.jp

Website http://sakado-s.tsukuba.ac.jp

幼児児童生徒数 男子 223名 女子 268名 合計 491名

幼児・児童・生徒の年齢 15歳～18歳

2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

※報告書提出時点～平成30年3月末までの活動は、予定(見込み)として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項1-1、2-1に対応

本校では平成20年に校内の国際教育推進委員会(Committee of International Studies、以下「CIS」)を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」、ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際ESDシンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成26年から5年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校の指定を受けることになった。語学だけではなく、「グローバル社会において、自分は社会と将来どのようにかわり、平和で持続可能な社会を実現するために、自分は何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視している。

本報告では、今年度の取り組みのうち、第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング@インドネシア、国際的視野に立った卒業研究支援プログラム、第6回高校生国際ESDシンポジウム

1. 国際フィールドワーク in インドネシア

国際フィールドワークは、本校の SGH 事業の中核となる活動の一つで、国際的な課題に対して、本校の生徒が海外の高校生と協働し、課題の解決策を自分たちで考え、そして解決にむけた行動をとれるようになることを目的に開設している。また、将来、グローバル人材として世界のリーダーとなり活動できるようになるため、広い視野と国際的感覚を育成するとともに、将来世界で活躍する際に必要になる、世界とのネットワークを高校時代から生徒自身が構築することも目指している。

4 回目になった 2017 年度のフィールドワークも、「インドネシア 100 年の森プロジェクト」とし、インドネシアの姉妹校であるボゴール農科大学附属コルニタ高校、およびインドネシア環境林業省附属高校の高校生とともに、人と森の関係について考え、持続的に森が維持されていくための方法を探し実践した。本年度も昨年と引き続き、エコツーリズム班、環境教育班、地域開発班の 3 グループにわかれ、各グループに、本校、コルニタ高校、環境林業省附属高校の生徒がそれぞれ入るようにグルーピングを行い実施した。班ごとに、アクションプランを作成した後、それに基づいて国立公園周辺の村落で活動を行った。本年度は、2017 年 3 月に実施したボゴールリーダー会議（8 月のフィールドワークにむけて各校の代表が 2 名ずつ集まり、フィールドワークに向けて活動内容を話し合う）参加者が全員参加した初めてのフィールドワークとなった。そのため、とくに地域開発班は事前に、非木材資源の一つである「バナナペーパー」を活動に取り入れていくことが決まっているなかでの活動であった。

2 実施内容

本年度は、日程表にも記載したように平成 29 年 7 月 29 日から 8 月 17 日（帰国日は 18 日）現地 20 日間で行った。20 日間のうち、8 月 7 日までを「インドネシアの森林と環境を守るための活動」、8 日から 13 日までを「国内外の高校と活動成果を共有する」、14 日から帰国日までを「グローバル課題の現場を知る」と位置づけておこなった。

本年度の、大きなチャレンジは後述する「第 1 回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング」を、国立公園周辺でのフィールドワークを終えたから開催したことだ。SGH も、4 年目を迎え、各校で成果が出ているところであり、また指定 5 年を経過した後、5 年間の成果をどうまとめ、何を継続させていくか検討する時期に入っている。本校は、5 年経過後もインドネシアをはじめ、アセアン各国との関係は維持していきたいと考えている。また、SGH の成果を、国境を越えて還元していきたいと考えている。今回は、その第 1 回目を実施した。

また、今回、本校の卒業生でボゴール農科大学に 1 年間留学経験のある卒業生が海外交流アドバイザーとして、フィールドワークに加わった。本校のフィールドワーク実施地域が、彼女の卒業研究のフィールドと近接していたため、様々な情報提供と現地指導を本年度もお願いすることができた。また、現在、グヌングデパンランゴ国立公園に赴任中の、JICA 国際協力機構の青年海外協力隊員として活動されている浅川氏にも協力をいただいた。フィールドワーク活動の質を上げていくためには、このような現地でのサポート体制があると大変ありがたい。今後とも、学校外の様々なネットワークづくりを進めていきたい。

班別の活動では、地域開発班の活動で特に、昨年度から連携している地元サロンゲ村の婦人会組織（PKK）と継続的に連携を図ることができた。地域開発班は一昨年まで、自力による商品開発を目指していたが、昨年の調査で、PKKをはじめ様々な組織が、地元産品を利用した商品開発を行っていることがわかった。一方で、商品のプロモーションやブランディング、あるいはデザインなどで高校生が貢献できることが多いことが分かった。実際に、PKKの商品を国立公園訪問者に販売実習をおこない、多くのフィードバックをえた。それを PKK にも伝えるという活動を行った。それをさらに発展させる形で、本年度は非木材資源で森林保全にもつながる「バナナペーパー」を活用したパッケージングに取り組んだ。地域開発班の活動は、その後大きな成果を上げることとなった。平成 29 年 12 月に、平成 30 年度のフィールドワークの打ち合わせのためサロンゲ村を再訪した際に、地元の婦人会のメンバーが自主的に、バナナペーパーの製造を始め、改良した製品を継続的に作り始めていたのである。例えば青年海外協力隊員等が地元へ張り付き技術移転を試みたとしても、実際に地元へ根付いていくことは稀で、隊員が帰国後は活動が終わってしまう場合も多い。しかし、今回は、高校生の熱意とアイデアで地域住民の環境へ配慮した行動変容を引き起こす可能性が示唆された。

エコツーリズム班は、議論の末、そもそも高校生自身がエコツーリズムについて知識が少なく、参加経験も乏しいことから、サロンゲ村の地域住民にエコツーリズムの現状調査を行い、グリーンツーリズムなど農村部におけるポテンシャル調査も実施し、最終的には自分たちで農村部におけるエコツアー企画を作ることとした。そして、フィールドワークに参加していないコルニタ高校の生徒をサロンゲ村に招待し、ツアーに参加してもらいフィードバックを得ることとした。サロンゲ村には広大なお茶畑が広がっており、高原野菜の産地ともなっている。空気も澄んでおり、とくに都市住民にとっては憩いの場となりうる。一方で、お茶畑は森林を伐採してできたもので、実際に国立公園地域の境界線まで畑の開墾が進んでおり、何をもってエコツーリズムとするかは高校生の間でも議論が分かれた。本年度は、ひとまずその現状も踏まえて、高校の友人に農村部地域の良さと課題を知ってもらうことを主眼においたプログラムを策定してツアーを実施することとした。

環境教育班は、人々の行動変容を起こすためには、できる限り年齢が早い段階での環境教育が必要であると考え、地元の小学校における環境出前授業を実施することとした。出前授業の内容は二つとし、1) インドネシアで課題となっているごみ問題を解消するために、ごみ問題への意識を高めるための活動を行う。ただし、小学生が興味をひくように、ゲームを取り入れ、ごみ分別ゲームを取り入れて行う。2) 森林の多面的機能をわかりやすく伝えるために、土壌による保水機能や水質浄化機能を見える形で提示できる簡単な実験を行う。ただし、地元にある簡単な資材を用いてできる実験道具とする、以上 2 点で実施することとした。

本年度も、最終報告会にジャカルタからインドネシア政府環境林業省幹部が参加し、生徒の発表に対してコメントを多数寄せてくれた。あわせて、11 月に東京で実施する「第 6 回高校生国際 ESD シンポジウム」への参加代表生徒の選抜も合わせて実施してくれた。SGH の開発当初に掲げたインドネシア政府への提言を実現しつつ、実質的な連携がさらに進んできた。この協力関係をさらに発展させていきたい。

2. 第1回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ

SDGs とは、Sustainable Development Goals の略である。2015 年 9 月、ニューヨーク国連本部において開催された「国連持続可能な開発サミット」で、193 の加盟国によって「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ（2030 アジェンダ）」が、全会一致で採択された。この、2030 アジェンダでは、「誰一人取り残さない-No one will be left behind」を理念として、国際社会が 2030 年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための重要な指針として、17 の目標（ゴール）が持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals : SDGs）として設定された。

これまで日本国内では、本校と交流実績を持つ海外校との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、2012 年から「高校生国際 ESD シンポジウム」を実施してきた。SGH 指定から組織した S-CIS（生徒国際教育委員会：Student Committee of International Studies）のメンバー（本校の 1~3 年次生で国際教育活動に興味のある生徒が主体的に参加している）が中心となり、受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作、全体司会やシンポジウムのファシリテーターを行ってきた。この活動を海外にもひろげ、本校と海外の学校との実質的な交流を深め、さらには SGH の成果を国内だけではなく海外へも発信していくために、本年度、あらたな取り組みとして、平成 29 年 8 月 10 日、中央ジャカルタにあるインドネシア政府環境林業省のホールにおいて、「第 1 回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング」を開催した。ESD は、広い概念的な言葉のため、各学校の ESD 活動をより具体的に位置づけ、それぞれの関連性を可視化するツールとして有効であると考え、SDGs を用いることとした。

当日は、日本から本校、大阪府立泉北高等学校、中部大学春日丘高等学校の SGH3 校、インドネシアからは、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校、インドネシア政府環境林業省附属林業高等学校、プナブール高等学校、ブカシ国立第 1 高等学校、ダルマガ国立第 1 高等学校の 5 校、計 8 校が参加して実施した。各学校の課題研究の発表を SDGs と関連付け、発表を行った。当日は、ポスターセッションも行い、これまで国際で実施してきた ESD シンポジウムのノウハウを生かした国際シンポジウムを海外で運営することができた。



第1回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ

(2017 年 8 月 10 日、於：インドネシア政府環境林業省ホール、インドネシア 5 校、SGH 校 3 校が参加)



3. 第6回高校生国際ESDシンポジウム

大会テーマ：

SDGs × High School Students - We Are the Change Makers for 2030.

(邦題) SDGs × High School Students - 「2030年」に向けて私たちができること

今年度のESDシンポジウムも、国連の持続可能な開発目標（SDGs）を前面に打ち出し、開催した。SGH校は、多様な課題研究に取り組んでいる。いずれのテーマもSDGsの達成に貢献する内容が多いことから、主催者には国際的な政策課題に照準を合わせた大会にするという意図があった。

また、課題研究活動の深化を目指すために、SGH校だけではなく、今年度は企業にもブースを出展していただいた。SGH校の中には、海外フィールドワークの際に企業やODAのプロジェクトサイトを見学する機会が少なくない。そのため、ネットワーキングの機会としても活用してもらいたいという意図があった。

さらに、生徒間の交流を促進させるために、「分科会」を開催した。SDGsの目標に沿ったテーマを設定し、各分科会での内容を「スローガン」としてまとめてもらった。初の試みであったが、初めて出会った高校生たちが、SDGsを軸に真剣に議論することができる「場」を提供することができた。

①生徒による大会運営

第4回大会から、大会の運営はほぼ全て本校の生徒及び姉妹校のボゴール農科大学附属高校の留学生が行っている。受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作はもちろん、全体司会も生徒で行う。彼らは4年前に結成されたS-CIS（生徒国際教育委員会：Student Committee of International Studies）に所属している。本校の1～3年次生で国際教育活動に興味のある生徒が主体的に参加し組織するこの団体は、筑波大学留学生（AIMS：ASEAN International Mobility for Students）との交流や本校を訪れる海外生の歓迎会、文化交流会等様々な活動を運営し活発に活動している。ちなみにS-CISという名称は、教職員の国際教育委員会：CIS（Committee of International Studies）に付随する団体として位置することによって由来し、これまで教職員が生徒のために先回りして行ってきた様々な運営を生徒自身が担うことで、教員主導ではない高校生主体の国際交流の実現を目指している。この団体の活動により、まさに高校生による高校生の国際シンポジウムが実現できている。

生徒による運営を可能にするための具体的なとりくみとしては、小さな行事運営を何度も経験させること、活動の継続性を図るため1年生を積極的に参加させることの2つがあげられる。インドネシア姉妹校から生徒を受け入れる歓迎会、筑波大学の留学生が訪問する際の歓迎会、文化交流会等の行事をシンプルな形にしたうえでルーティン化し、生徒に何度もそのような行事の準備・会場設営・司会進行等経験させる。英語の司会原稿等も先輩から受け継ぎ、慣れてくるとインドネシア語を織り交ぜるなどして工夫を加えていく。また1年生のときから積極的に重要な役割を与え、行事へ参加させることで、進級したとき後輩にノウハウを教える環境ができる。小さな行事の運営で自信をつけ、先輩からやり方を受け継ぐことで、教員に頼らずとも大きな行事を運営できるようになるのである。なお、毎年参加者からのアンケートに「生徒による運営がすばらしい」というコメントをいただいている。今後も、生徒がホスピタリティをもって大会運営に当たれるように指導したい。

②大会までの各学校との交流

今年度は姉妹校であるボゴール農科大学附属コルニタ高校（インドネシア）から10月に生徒4名、シンポジウムに合わせてタイ、フィリピン、インドネシアより生徒8名が約1週間ホームステイと本校での授業に参加した。期間中は本校生徒の各家庭で食事をし、日本式の風呂につかり、週末を楽しみ、日本語で授業を受ける。全教職員協力の下、生徒は様々な文化の違いや言語の壁を互いに乗り越えていく。この長期受入れの経験が、生徒教員保護者の異文化に対するハードルを下げ、シンポジウム期間中約20人の生徒教員を受け入れる中でも、より活発な交流を促進していると考えられる。

③保護者・教職員の協力

ESDシンポジウムのような大きな国際的行事を開催するにあたって、保護者・教職員の協力は不可欠である。本校では年間を通してアジア各国の生徒や教職員を迎えて交流を行う。その際、授業での受け入れやホームステイ受け入れは最も大切な部分であるとともに最も苦勞の多い部分であることも確かである。本校では「ホストファミリーバンク」への登録を呼びかけ、多くのご家庭が登録して下さっている（約50家庭）。日本で外国の生徒を迎え、共に生活する国際交流を保護者の皆さまが理解して下さるおかげで、毎年多くのご家庭からホームステイ受け入れ希望を頂いている。本校国際教育活動は保護者の協力によって支えられているのである。

また教職員の理解とサポートも大きい。当初は日本語のできない外国人生徒の受け入れに戸惑いもあったが、現在は海外からの生徒を受け入れることでクラスに良い影響があるという声も聞かれるようになった。HR担任や教科担当者の努力と創意工夫が、海外生徒の学校生活を支えている。

保護者・教職員という国際交流活動をサポートする大人の存在はSGH活動に不可欠な要素である。国際交流に直接関わる担当者が丁寧に時間をかけて説明し、充実感のある交流活動を続けることで、教職員全体、保護者の国際交流に対する受容度が高まる。少しでも不安のあることに対しては何度でも相談に乗り、初めてホームステイを受け入れるご家庭には緊急時の対応をきちんと伝える等して、受け入れの「成功体験」を何度でも共有することで、「受け入れは当たり前。次はどう工夫するか」という雰囲気が醸成される。



海外招聘校4校（タイ、フィリピン、インドネシア）および全国のSGH校・アソシエイト校の生徒及び教職員（約200名）で最後に集合写真

4. 「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」

平成 20 年度より実施しているこのプログラムは、3 年次の学校指定必履修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う（または行おうとしている）生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20 年度から 28 年度までの 9 年間で計 55 名の生徒がこのプログラムに応募し、うち 18 名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。

29 年度においては 2 年次生を対象に募集した結果、5 名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。

生徒	希望渡航国	研究テーマ
A	フィリピン	フィリピンにおける女性の社会進出に関する研究
B	ベトナム	ベトナムの特別支援教育について
C	タイ	タイの日本語教育について
D	中国	中国の水質問題について
E	フィリピン	フィリピンの英語教育について

CIS において「海外への渡航により卒業研究の深化が十分期待できるか」「費用に問題はないか」「実現可能性は十分か」などの観点から書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った結果、生徒 A1 名を支援対象とすることに決定した。このプログラムは、国や地域は指定せずに実施してきたが、毎年、予算が厳しくなってくる中で、遠方への派遣が厳しいこと、また 2 年次「T-GAP」でアセアンに関する活動を行っていることから、渡航先をアセアン+2（中国・韓国）に限ることとした。

フィリピン渡航に関しては、昨年度国際連携協定を締結したフィリピン大学附属ルーラル高等学校、本校の英語科教員（フィリピン出身）が連携して準備を行った。内容も、非常にすぐれたもので、SGH 開発科目「グローバルライフ」・「T-GAP」などの効果が出ていると考えられた。

(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input checked="" type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input checked="" type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input checked="" type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input checked="" type="checkbox"/> 5. その他(自由記述 時間割外実習科目)	

エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

世界がもし100人の村だったら 貿易ゲーム 世界一大きな授業 ユニクロ服のチカラプロジェクト 世界食糧デー月間 MY WORLD. THE UNITED NATIONS GLOBAL SURVEY FOR A BETTER WORLD. http://vote.myworld2015.org/ PARC オーディオビジュアル作品 SDGs ハンドブック JICA 中学生高校生エッセイコンテスト ユネスコユース作文コンテスト
--

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

本校のユネスコスクールでは、全体の実践テーマを「総合学科の特色を生かした多角的アプローチによる ESD 実践」として、以下の 3 点を重点課題としている。すなわち、1) 総合学科特有の多様な教科目から、持続可能な社会づくりに向けてアプローチする。2) ESD の視点から教科目の実践、さらに教科間連携や合科的な学習を推進する。3) 国内外の高校生と研究交流の機会を持ち、国際感覚を持ちながら学習を展開する。である。

本校での ESD 実践の特徴は、教科・科目・分野横断型であること、課題解決型であること、国際協働型であること、生徒参加型であることが挙げられ、総合学科の特色を生かしての実践である。総合学科の教育実践を行うことが、それ即ち ESD 実践と言うこともできる。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

校内では国際教育推進委員会（CIS）および SGH 推進委員会を中心とした運営体制をとっている。本校の ESD は国際教育に重心を置きながらも、農業科や福祉科などの専門教育を生かした取り組みとなっている。そうした取り組みを文科省指定のスーパーグローバルハイスクール（SGH）の活動としても機能させている。生徒の主体的な活動を促す組織として生徒国際教育委員会（S-CIS）も発足させ、留学生の受け入れ時などに歓迎会や交流会の運営を行っている。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

外的評価として SGH 指定校として求められている設定目標の達成状況を調査すると共に、内的評価として学習活動による生徒の意識の変容についてアンケート調査、自由連想法、国際 FW 参加者への質的調査を実施した。1 年次生への自由連想法では、Pre-Post での視野の広がりが確認できた。また、3 年次生のライフプランの分析では、授業やカナダ校外学習、卒業研究など、学校内外での様々な取り組みが、資質・能力の 3 つの柱を育み、そして彼らの進路選択において大きな影響を与えていることがわかった。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

校内へは国際教育推進委員会の広報誌「CIS NEWS」にて諸活動の成果を周知するとともに、学校ホームページのブログにおいて校内外に発信している。また、11月の高校生国際ESDシンポジウムおよび全国SGH校生徒成果発表会、2月に開催する総合学科研究大会およびSGH研究大会などにおいて全国から来場される先生方や生徒との学び合いの場を提供している。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度)

※チェック事項 2-3 に対応

文部科学省初等中等教育局国際教育課、及び独立行政法人国際協力機構(JICA)、インドネシア政府環境林業省および教育文化省そして、駐日インドネシア大使館、エイピーピー・ジャパン株式会社(APPJ)、公益財団法人イオンワンパーセントクラブ、IC-NET株式会社、国際協力機構JICA地球ひろば、地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)、WWF ジャパン、株式会社Rubah4、アジアペーパーアンドパルプ(APP社)

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度)

※チェック事項 2-4 に対応

神奈川県立有馬高等学校、順天高等学校、栃木県立佐野高等学校、明治学園高等学校、群馬県立中央中等教育学校、中部大学春日丘高等学校、お茶の水女子大学附属高等学校、静岡県立三島北高等学校、茨城県立土浦第一高等学校、神戸大学附属中等教育学校、山梨県立甲府第一高等学校、福岡県立京都高等学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校、埼玉県立不動岡高等学校、長野県上田高等学校、東洋英和女学院高等部、大阪府立泉北高等学校、京都学園高等学校、三重県立四日市高等学校、佐賀県立佐賀農業高等学校、九里学園高等学校、同志社国際高等学校、筑波大学附属駒場高等学校、フィリピン大学附属高等学校ロスバニョス校舎(フィリピン)、カセサート大学附属高等学校(タイ)、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校(インドネシア)、インドネシア共和国環境林業省附属高等学校(インドネシア)、インドネシア国立バンドン第1職業高校(インドネシア)

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

10 年程前から授業の中で MDGs を取り上げていた。現在では、様々な教科の中で当たり前のように SDGs が取り上げられ、校内には生徒が制作した SDGs のロゴマークを冠した節電や手洗い励行などを啓発するポスターが貼られるまでになった。「持続可能な社会」は誰もが知るキーワードとなり、1 年次「グローバルライフ」で私たちの生活が引き起こす世界の諸問題を知り、2 年次「T-GAP」で社会課題に対するアクションを起こし、3 年次「卒業研究」で持続可能な社会づくりに向けた課題追究にチャレンジしている。

(3) 平成 30 年度の活動計画（200～400 字程度）

本校は、SGH 指定後、「オープンプラットホームスクール」をキーワードに、本校のグローバル人材育成のための教育課程開発を行うだけではなく、国立大学附属高校としての使命を果たすべく、「高校生国際 ESD シンポジウム」および「SGH 校生徒成果発表会」を主催することで、SGH 校間の課題研究ベースの交流を促進してきた。さらに、「インドネシア日本 SDGs ミーティング@ジャカルタ」をインドネシアで開催することで、諸活動の成果を日本国内だけではなく、インドネシアの高校にも普及してきた。

平成 30 年度は「全国 SGH 校生徒成果発表会・高校生国際 ESD シンポジウム」をユネスコスクール加盟校などにも情報提供を行い、SGH 校以外も参加できる形にし、SGH 事業の成果普及をすすめていきたい。また、「インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ」もユネスコスクール加盟校などにも情報提供を行い日本側参加校を募る。そして、高校生が小学校または中学校に出向き出前授業を行ったり、本校へ訪問してもらい、共同事業を実施する。諸活動の成果の他の世代への普及を図っていく。